



ESSAY

教皇の旅から世界を知る 土肥秀行

In Viaggio (イン・ヴィアジッジョ、「旅路にて」*「旅するローマ教皇」の原題)とだけ題された、教皇フランシスコの37の外遊をめぐるこのドキュメンタリーフィルムは、のっけから人懐っこい彼のイメージを覆す。斜めにうつむいて沈思する姿は人を寄せ付けない雰囲気をもたらす。そこに彼の苦悩や孤独を読み取るのはたやすい。ただどんな事情があるのかはわからず、われわれとしては、これから本編で描かれる、世界と対峙する旅から察していくしかない。国際版ポスターにも使われている彼の背中も意味深である。どの土地に行っても繰り返される、通称パパモビルに乗ってのパレードで、沿道の人々の熱狂に応える孤独な後ろ姿は、映画のライトモチーフだ。監督ロージは、800時間という既存のフットージをつないでこの映画を完成させているが、きちんと自分が欲しい映像だけを選びとっている。手を振る教皇の肩襟はめくれかえり、飛行機(専用機ではなくチャーター、彼のモットーである清貧の証)のタラップを降りるときは後頭部から白帽(ズッケット「ちびかぼちゃ」という)が吹き飛ばされる。確かに彼は孤独なのだが、その姿はどこか可ましい。ロージは茶化すつもりはない。たとえば真剣に歩いている人ほどつまづいてしまう、そうした人間の性たるペースを、監督は見せている。むしろそれは映画の本質かもしれない。いくら真面目であっても、カメラを通した姿はどうしても滑稽なのである。だから観客が思わずクスッとしても、不遜とはならず、映画的反応として許容される。ロージもきっと好むであろうイタリアの文豪ピランデルロも言っていたのではないが、悲劇のなかにこそユーモアがあると。

ロージが見せようとするのは旅先の様子だけではない、移動そのものも映画の重要な要素だ。機内の窓から外を覗くフランシスコがたびたび映し出される。これから訪れる土地を上から確認しながら、もの思いにふけている。彼の視線の先では、モンタージュにより、富士山が雲海から山頂部を突き出している。それにこれはいささかやりすぎだが、ヒロシマ到着シーンに先立って映し出されるきのこ雲は、実際には南

洋での実験時のものなのだが、フランシスコが想像したであろう機外の光景なのである。それに移動中は、教皇によるショウが見ものである。恒例の機内記者会見のことである。ロージ個人の好みというよりは、外遊中の教皇に、みな期待してしまう舞台である(飛行機の後部に座っている密着記者たちへのサービスとしてなされる)。そこでは教皇は必ず熱弁をふるう。世界で最も影響力のある人物にしては、無防備さが心配になるくらい、直球なのだ。チリの未成年虐待疑惑の司祭(しかもフランシスコと同じイエズス会所属)を擁護するのに「証拠がない」とチリでプレスに向かって発言し、激しい抗議活動に火を付けてしまった際も、帰りの機内で素直に謝罪している。また、エルドアン大統領を不機嫌にさせてしまった、トルコ訪問時の、アルメニア系住民虐殺の歴史についての批判的なコメントをした後も、機内で、撤回を拒否して、ふみこみすぎではないと主張する(いちおう前々代のヨハネ・パウロ2世の非難の言葉に倣っているとの弁明を口にするが、自身の考えにもとづくのはあきらか)。結局は、一般のイメージを裏切らない、いわゆる「いいひと」との結論となるのだが、ロージはきちんと、必ず付きまどってくる誤解やトラブルを見せようとする(扱われないのはバチカン銀行がらみの不正くらい)。

近寄り難くも可ましい教皇像は、ロージが世俗に重きをおく考えであるからこそ映し出せる。もし信仰に篤い作り手であったら、両極に引き裂かれたイメージは呈示できない。幾多の教皇関連本や伝記映画は、どれも熱心なカトリック信者が書き、撮っているので、「いいひと」像をひたすらなぞってしまう。ロージ本人の告白にある「私は信者ではありません」との言葉が、教皇に多面性をみることにつながる。非クリスチャンである日本の多くの人々にとって、教皇礼賛一辺倒でないのは助かる。ロージの切り口は親しみやすいのだ。

あるシーンでは、フランシスコとエルドアンとの間に気まずい沈黙が続く。精神的リーダーであると同時に、ヴァチカン市国の国家元首でもあ

るため、フランシスコはトルコで中隊による儀仗にまで臨んでいた。かみあわなさは存分に伝わってくるが、そのような難しい関係にある国にこそ、フランシスコは単身飛び込んでいくのである。単に旅するだけではない、考え抜いた旅をしている。

映画ではキューバにも行く(2度も)。これこそ微妙な関係である。めずらしくパレードの沿道は閑散としている。フランシスコもわざわざ刑務所の慰問をする。共産主義国家としてはあまり見せたくない部分を突く。前々代と比べ多言語遣いではないフランシスコだが(映画の半分はヴァチカンの「公用語」であるイタリア語、もう半分は母語スペイン語、あとアメリカでは英語、アフリカで少しフランス語を話す)、キューバでは現地の訛りを加えたスペイン語にしている。器用ではないものの、うまくローカルに合わせている。チリでは、隣のライバル国アルゼンチン出身として開き直って下世話なジョークで会場を沸かす。

筆者がブエノスアイレスを訪ねること4回、その都度フランシスコが通った小学校のあるカバジート地区に赴く。ある調査のためなのだが、地元の空気を肌で感じている。都会とはいえ、素朴なコミュニティ意識が生きる地区だ。イタリアからの移民二世ということもあるが、自然と和を作り出すフランシスコのような人ができあがるのもわかる気がする。一方で、軍政の続いたアルゼンチンで、首都の大司教であったフランシスコに、政治権力との癒着があったとの疑いの声はたえない。その真偽はともかく、武力による緊張を強いられていたフランシスコは、紛争に対する嗅覚や勘を、悲しいかな、鍛えられてしまっている。監督から直接聞いた話として、驚くべきことに、フランシスコは、2014年の時点ですでに、ドンバス地域がウクライナ紛争の火種となることを見抜いていたとのことである。その彼と映像を通してともに旅することで、世界の現在形を目の当たりにする、そんな見方がこの作品で可能なのである。

惜しむべくは日本のパートが広島だけであることだ。2019年11月に

ロックスターの来日並みに日本が湧いた教皇の滞日4日間の初日、フランシスコがまず赴いたのが長崎である。歴史的にキリスト教徒が多く、キリシタン弾圧から原爆投下まで多くの悲劇に見舞われた土地だ。長崎が教皇の心に深く刻まれていることは、よく知られている。あの有名な写真「焼き場に立つ少年」のポストカードに平和のメッセージを添え、全世界に発信したこともある。第一訪問都市の長崎で真っ先にむかった爆心地公園、セレモニーに先立ち中心地碑の前で独り祈る教皇。その長さ実に100秒、周囲に戸惑いを生じさせるほどだった。印象的で、訪日のはじまりにしてすでにハイライト、実にフランシスコらしい瞬間だった。ロージの作品でも、祈りにふける彼は孤独である。誰も抗いようのない祈りの強さが、諍いを止めに世界をまわる彼の原動力となっている。

(どい・ひでゆき／イタリア文学・東京大学文学部准教授)

